

■ フォト・エッセイ ■

# 蘇るレトロモダンな上海

写真・文

中川道夫

Michio Nakagawa



1. かつてバンドと呼ばれた外灘。外灘5号（手前、旧日清汽船ビル1925年）の上階は夜景が楽しめる人気スポットだ

この春、一年ぶりに上海の町を歩いた。ただ街角の様子は前回とはずいぶん違う。あちこちで遭遇した建設工事の騒々しさが静まり、人びとからせわしなさがなくなった。ゆったりとした時が流れている。アクセルを踏み続け、過熱した中国経済は北京五輪の終幕とともにそれ緩めたものか、また世界同時不況が影をおとしているのか。

上海は来年五月に万博を開催する。テーマは「より良い都市、より良い生活」。

二〇一〇年、世界の都市の人口は五五％になるといふ。地球環境とともに都市とどう向き合うのかは、二一世紀の人類の最重要課題なのだ。人に住み良い都市というのは合理的な計画や整備、行政だけではないだろう。その町が時間を積み重ねたパイ皮のような歴史や文化の保持や記憶の継承も不可欠だ。人びとが町に誇りをもち生きられることが、活き活きした都市の源泉なのではないか。

上海万博の会場は町のランドマークの黄浦江の両河岸にできる。長江の支流である地下鉄の増設や大規模な道路などのインフラ建設が進んでいるが、会場は上海の古い都心街からは少し離れ、上海のもっとも魅力的な街区、かつて列強が支配した租界のなごりを見て歩くのには支障はない。

一九八〇年代から、租界都市の痕跡とそ変貌を撮影してきた私には、九〇年代初頭からの改革開放路線の最先端で、都市の改造に突き進んだこの町の有り様が心配だっ





4. アールデコ様式が美しい西湖公寓（旧ワシントンアパート1928年）



2. 外滩3号（旧ユニオン・アシュランス・カンパニービル1916年）はマイケル・グレープスによって再生され、レストランからは浦東の摩天楼を望める



3. 上海戯劇院の「優秀歴史建築」のプレート。戦中、川喜多長政が関わっていた映画会社の中華聯合製片公司本社（1942年）



た。不動産投資ブームもあり、古い建造物の取壊しや街区の消滅。それはメタリクナオフィスビルや高層マンションに象徴される、上海のなじみの光景だった。

「浦東には上海弁をしゃべらない人達がいって、子どもにも教えない」と、魯迅記念館で出会った青年はいう。彼らはビジネスの場所としてしか上海を考えない、のだと。旧街区の対岸のマンハッタン化した浦東区は、国際金融都市に肥大化してしまった上海の宿命だろうか。二一世紀のメガロポリスには固有の都市のアイデンティティなど不要なものなのか。近年、上海市が「優秀歴史建築」六八〇箇所のリストを発表した。市中に残るヴィンテージな建造物を調査し、保存が決定したものだ。その多くが欧米人や日本人の手によるが、これまで激しかった再開発のための破壊から歴史文化史跡を守ろうというのだ。そのせいか街を歩くと既知のものは当然ながら、知らずにいた建築物も保全されている。節度なく開発しているようでいて、要所はしっかりコントロールされている印象がする。

開発か保存か？歴史建造物の存続の是非は日本でも議論され、ときには社会問題化する。民意は反映されているのだろうか？いま上海で進んでいる行政主導の都市づくりはそのひとつの答えなのかもしれないが、いうまでもなく上海という町は阿片戦争の結果、一八四二年の南京条約によりイギリスにこじ開けられた港であった。それま





7. 瑞金賓館の4号館として再利用されている旧「三井花園」は三井洋行支店長邸でもあった



5. 復中公寓、旧フランス租界はモダンデザイン建築の宝庫だ（旧エリザベスアパート1930年）



6. 現代アートの発信基地として開発された莫干山路のM50はかつての紡績工場跡地だ

で清朝の県城と漁村だけの砂州のような場所、西洋列強は行政権や警察権をもつ租界を手に入れる。その後、欧米の冒険家のような投資家や貿易商や建築家が蟄集し近代的な都市、いまの上海の原形を建設した。上海の〈近代Ⅱモダンイズム〉は外国人によってもたらされたものだ。

上海の租界だったエリアを歩くと、西洋建築がどこでも見られる。そのほとんどが一九世紀末から二〇世紀前半のもので、ネオ古典様式、アールヌーヴォー、アールデコなど。またオリエント趣味の折衷様式もある。設計した建築家は母国で知られ、評価されていた訳ではない。彼らは極東のエルドラドで欲望と才気を解き放ち、当時の欧米の最新建築技法や美的トレンドを引用し、モダンイズム都市をデザインしたのだ。

「冒険家の楽園」に終止符を打つのは中華人民共和国の成立だった。上海は帝国主義者による侵略と植民地支配の象徴であり、頹廢の都だった。

一九六九年の夏、私は日本の学生訪中団の一員としてこの上海を訪れたが、そのときの奇妙な光景をいまも忘れない。林立する外滩の西洋建築群の壁面に朱色の文革のスローガン、街路には赤い腕章の紅衛兵が闊歩していた。この上海、どちらが真の姿なのだろうか。

「この頃の上海のほうが良かった。」と、Hさんは八〇年代に上梓した私の写真集を手にして呟いた。上海市のイメージアップ

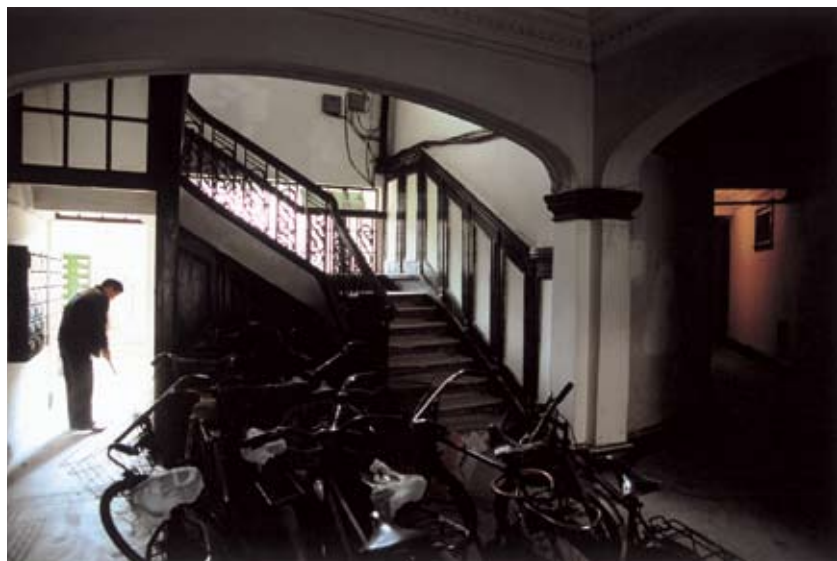




9. 百楽門・パラマウント  
(旧百楽門舞厅1932年)は  
租界時代の代表的なダンス  
ホールだった。現在も同じ  
ように使用されている



10. 金色のデコの意匠が残  
る旧ブロードウェイシアター  
(1930年)。虹口区には欧州  
から逃れてきたユダヤ難民の  
ゲットーがあり、ここでオー  
ケストラが公演していた。現  
在はバーなどが入る



8. 修復された重慶公寓(旧呂班公寓1931年)、スパイ・  
ゾルゲやジャーナリストのスメドレーが棲んでいた

を図る媒体を製作する彼女は上海に生まれ育った。八〇年代は学生だったのだろう。鄧小平の「南巡講話」以来、上海は中国の改革開放の牽引車として爆走しはじめた。九〇年代は再開発と投機熱の巷となり破壊と建設が日常になる。

八〇年代までの上海は、以前の租界時代の建築や街並がそっくり残っていた。上海人にとり洋風モダンイズム建築にとり囲まれた記憶の風景は自己確認の証でもある。

新世紀を迎えた上海は、さきの六八〇箇所 の保存建築を歴史軸にして都市の再活性を計っているようにみえる。それまでの歴史観から西洋文化との混交こそ都市上海を育み、そのアイデンティティだという空気が醸成されてきたのではないか。屈辱の支配とモダンイズムの誇りという両義性を、上海人は冷静に受けとめている。

いま市中の多くの歴史建造物はリノベーションされて、都市の共有の場所として再活用されている。レストランやカフェ、ファッションやアートスペース、住宅は自由に改装されて新規な住民を呼び、ホテルはレトロモダンの香りを売り物にしている。高層ビルだけではない上海。それは外国人にとっても付加価値のある観光資源だ。

上海の人びとは過去を眺めつつ、悠々と時を迎えているように見える。上海の試みは新世紀の都市の啓示になるかもしれない。

(ながかわ みちお／写真家)